

東京学芸大学ヒューマンライブラリー —2022 報告書

2022年12月11日（日）開催

東京学芸大学ヒューマンライブラリー2022 実行委員会

代表 | 岡 智之（留学生センター）

目次

ちらし	3
東京学芸大学ヒューマンライブラリー2022「本」のタイトル、あらすじ一覧	4
当日プログラム	6
当日の写真.....	8
準備と当日までの活動.....	11
当日スケジュール	11
反省会議	12
グラフィックレコーディング（野月さやか作）	14
読者アンケート	17
読者の感想文	32
「本」のアンケート	36
スタッフのアンケートと感想文.....	38

はじめに

東京学芸大学ヒューマンライブラリーも2022年で、7年目になる。2020年から新型コロナウイルス拡大の影響でオンライン開催が続いたが、3年ぶりに2019年度と同様な形で、日曜日の昼間に対面で行う形となった。オンライン開催よりも全体としては少なめだったが、計54名が集い、活気あふれる会となった。とりわけ、今年は「本」の半分以上が入れ替わって、13冊のうち新しい本が7冊入った。先住民アイヌ、在日朝鮮人、中国残留日本人孤児2世、移民女性、失語症などは新しいジャンルであり新鮮感があった。学生スタッフも今回は新しい学生が9名増え、12名となった（院生3名、研究生2名、学部生7名（うち1年生3名））。事前に、学生スタッフと新しい「本」の読み合わせも行われ、スタッフとしても新たな学びの場となった。対面開催の制約もあり、読者自体は減ったのだが、わざわざ、大学に足を運んで聞きに来てくださった方々の熱意が感じられる。教室のブースでは、「本」と「読者」の熱心なやり取りが行われた。「本」の都合で、3冊の「本」はオンラインとなったが、適宜、オンラインを含めての開催も取り入れていくのはいいと思う。報告書での読者の感想などを読んでいただいても、やはり、対面で直接語り合えることの素晴らしさが実感できた。少数での語りあい、というのがやはり、ヒューマンライブラリーのだいご味だと感じた。最後の交流会でも、皆さん、すごい勢いで話されてものすごい活気を感じられた。毎回、運営していくことは大変なのではあるが、このヒューマンライブラリーの大きな意義とやりがいを感じる。引き続き、ヒューマンライブラリーの開催を続け、発展させていきたいと考える。皆様の引き続きのご協力とご理解をお願いいたします。

東京学芸大学ヒューマンライブラリー2022 実行委員会代表 岡 智之

東京学芸大学 ヒューマンライブラリー

2022

東京学芸大学 playground ラボ

ヒューマンライブラリーは、在日外国人、障がい者、セクシュアルマイノリティなど、生きている「本」と「読者」との対話を通して、多様な生き方を認め合う、多様性に関われた社会の実現を目指すイベントです。本年は3年ぶりの対面開催になります。生きた「本」のタイトル、あらすじは、本ちらし 2, 3 ページにあります。5冊まで本を借りられ、30分ずつお話しできます。下記予約フォームで希望する「本」を予約してください。

日時：12月11日（日）12:30～17:30

場所：東京学芸大学 N 棟（中央4号館）3階教室

主催：東京学芸大学ヒューマンライブラリー2022 実行委員会（代表：岡 智之）

共催：playground 多様性ラボ GAIA、後援：小金井市教育委員会、小金井市社会福祉協議会、

協賛：東京学芸大学教職員組合

問合せ先：東京学芸大学留学生センター 岡 智之 okatom@u-gakugei.ac.jp

予約フォーム：<https://forms.office.com/r/vKAdSPc0wR>

ちらし

東京学芸大学ヒューマンライブラリー2022「本」のタイトル、あらすじ一覧

* 下記の「本」を5冊まで借りられ、30分ずつ対話できます。

作者名	カテゴリー	タイトル	あらすじ
関根摩耶 (NEW)	先住民族 アイヌ	二風谷の育ちと 「アイヌ」について	北海道の平取町二風谷、人口の多くがアイヌにもルーツを持つ地域で生まれ育った私の生い立ちや考えをお話します。(オンライン。1、2回目限定)
ソンサン ギ (NEW)	在日朝鮮 人	自身の民族性を忌 避していた或る朝 鮮人の変化	昔、朝鮮学校に通ってました。この社会において、こと朝鮮学校に関しては子どもに対しても容赦なく差別と暴力はふりかかります。小さいころからそういう経験をするとその内、「自分で自分を差別」しだす子がでてきます。私もそうでした。そんな私が、自分自身の民族性と改めて向き合うことになった経緯をつづった物語です。(オンライン。1、2回目限定)
朴梨香 (NEW) 欠席	在日朝鮮 人	在日朝鮮人として の自分	在日朝鮮人の両親の間に生まれ、小学校から高校までの12年間朝鮮学校に通ってきた。大学は日本の大学に進学をし、そこで留学同という団体に出会い今がある。朝鮮学校に通っていたときの自分と留学同で活動しているいまの自分を比較しながら自分の人生に関して伝えられればと思っている。
長江春子 (NEW)	中国残留 日本人孤 児2世	日本と中国の狭間 に生きて ～今の苦労は将来 の強みになる!～	中国残留日本人孤児の母を持つ宿命を生きてきました。特に中学から大学の10年間、中国と日本の二つの文化、二つの言語、無理解、貧困に苦しんできました。心の傷は今でも時々疼きますが、そうした経験から得たものも多く、今の仕事につながっています。多くの方に助けられて何とか生き延び、今は自分の宿命に使命を見出すようになり、自己開示を始めています。
Agalyn Nagase (NEW)	移民女性	移民女性と日本社 会—DV 被害者や シングルマザーの 支援経験から—	KAFIN は DV 被害者やシングルマザーの移民女性に対する様々な支援を提供する組織です。フィリピン出身の Agalyn Nagase さんは KAFIN の活動を通じ、これまで多数の移民女性を支援してきました。日本に暮らす移民女性が置かれた状況や支援実態についてお話します。(使用言語は英語ですが、適宜通訳がつきます。)
長谷川留 理華 欠席	ロヒンギャ 系日本人	迫害にもいじめに も負けないから今 ママになれた (オ ンライン)	私はミャンマーのアラカン州(ラカイン州)で生まれたロヒンギャ民族で、3歳までアラカン州に暮らしていました。父はアラカン州の公立学校で高校教師を務めていました。1988年、ミャンマー全国で暴動が起き、たくさんのロヒンギャ民族が拘束されたり、殺害されたりしました。その後、私が暮らす村にも、軍が父を探しに来ました。ロヒンギャの教師はほとんど拘束されました。父は国内で身を隠すのは限界があると考え、日本へ行きました。その後の人生について。
中嶋秀昭	難民(世界 の医療団)	ロヒンギャ難民の 状況と彼らへの支 援	ミャンマー北西部に住んでいる主にイスラム教徒のロヒンギャの人々は長年、政府から迫害を受け、隣国バングラデシュ等に逃れてきましたが、特に5年前の2017年8月25日に始まった軍による攻撃・殺害により70万人以上がバングラデシュに避難しました。現在、面積が約12km ² (東京都千代田区ほど)の難民キャンプに90万人以上が住んでいます。最近の難民の状況

			やミャンマー情勢との関連、私達の彼らへの支援等につきお話しします。(オンライン)
りゅーや (NEW)	LGBT	彼のお父さんのキーパーソンは僕!? 不思議な介護生活のお話	ひとつ屋根の下、彼と彼のお父さんとの3人暮らしの8年間。当初はカミングアウトをせずに年の離れた友人と紹介されて、家に転がり込んだ僕。ある日の夕食時に「二人の関係がホモだったら出て行ってほしい」と言われた修羅場も。月日が流れ、いつしか彼のお父さんの介護のキーパーソンはなぜか僕になっていたのです…
畑野とまと	LGBTQ+	ジェンダーアイデンティティのお話	テレビでは「心の性」などと説明されることがありますが、心の性をみたことありますか？私は見たことがありません。じゃあ、それはいったい何なのか？といったお話です。
ひらりー	LGBTQ	トランスジェンダー (MtF) 且つレズビアンというダブルマイノリティの日常について	「身体性が男性で、恋愛・性愛の対象が女性」という、傍目からはごく普通の男性にしか見えない、結婚もできるし、子作りもできる私。しかし実生活では、レズビアンのトランスジェンダー (身体性は男性、性自認は女性、恋愛・性愛の対象は女性) といった複数のマイノリティ性を持つ人々の存在が世間ではあまりよく知られていないために、その稀有な生き辛さ感を気軽に相談できる相手がほとんどおらず、一人で思い悩むことも多くあります。そんな私の日常をつづった物語です。
大谷重司 (おおたにじゅうじ)	視覚障がい	ベンチプレス世界チャンピオンの実態	1. 現役の健常者チャンピオンは眼が見えない64歳の男です。今年の3月の全国大会でも健常者の試合で優勝。 2. いろんな場面で視覚障害者は世間から分離されています。図書館でも点字図書。スポーツをするにも障害者専用のスポーツセンターがあります。その実態に疑問を持ち続けていました。 3. 町内でのスポーツジムへの参加。これだけで喜びは完結していました。 4. 可能性を見つけられたこと。限界を捨てること意識の変化。
小山祐介 (コヤ)	うつ病当事者	自分を知りたくて歩んでいます～当事者と支援者の視点から～	夢も希望もないまま就職、システムエンジニアとして勤めていた24歳のとき、残業100時間以上の超過労働、常駐先のパワハラが引き金となって鬱を発症しました。10回近く転職、たくさんの人に手を差し伸べてもらってアートやエンタメの活動をしていたところ、実体験を活かした起業の機会をいただくも、挫折。うつ病当事者であり、自立訓練施設職員(支援者)として働いていまだからこそ、気づき、話せることの全て、お話しします。
浜田有子 (NEW)	失語症・同名半盲	失語症ってなんだろう～ある日突然に話せない、読めない、書けなくなったら？～	旅行、料理本などの雑誌編集、フリーライターをしてきて、校了後のある日に脳梗塞で緊急入院、失語症(高次脳機能障害)、同名半盲(半側しか見えない状態の視野欠損)と診断。ひらがな、カタカナも全く読めず、言葉がでない。自分が書いたものも分からない。それからリハビリで言語と書く練習をしながら、小学生の国語を一から学びつつ。そんな過去と約10年たった今の日常をお話しします。

当日プログラム

東京学芸大学 ヒューマンライブラリー 2022 プログラム

日時：2022年12月11日（日）12時半～17時半（12時15分受付開始）

場所：東京学芸大学 中央4号館（北講義棟：N棟）3階教室

ごあいさつ

本日は、「東京学芸大学ヒューマンライブラリー」にお越しいただきありがとうございます。
ヒューマンライブラリーは、2000年デンマークで開催されて以来、現在までに70カ国以上で開催され、わが国でも全国的に行われている多様性理解のイベントになっています。東京学芸大学では今年7年目になり、13冊の「本」の方を迎えて、開催することになりました。本日は、「生きた本」との対話を心ゆくまでお楽しみください。 主催者一同

主催： 東京学芸大学ヒューマンライブラリー2022 実行委員会（代表：岡 智之）

共催： explayground 多様性ラボ GAIA

後援： 小金井市教育委員会、小金井市社会福祉協議会

協賛： 東京学芸大学教職員組合

お問い合わせ先： 東京学芸大学留学生センター 岡 智之（〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1）

電話 & Fax: 042-329-7235 / e-mail: okatom@u-gakugei.ac.jp

★ 当日カンパも受け付けております。よろしくお願いいたします。

ご利用手順

1. 受付で、お名前と予約（「本」の時間と場所）を確認いただけましたら、予約された時間帯の5分前までに、対話の部屋にお入りになり、席にお座りください。
2. 対話の時間は、30分です。終了5分前にタイムキーパーが連絡いたします。終了時間が来ましたら、それ以上質問などなさらずに、すみやかに終了ください。
3. 対話以外の時間は、N304の読者控室でおくつろぎください。
4. 16時30分からN313で、本の方・読者の方・スタッフの交流会を行います。よろしければご参加ください。
5. 読者アンケートがありますので、アンケートフォームより、「本」へのメッセージなどお書きください。
6. 何か質問等ございましたら、青色のスタッフジャンパーを着た、スタッフに遠慮なくお尋ねください。

利用上のお願い

1. 「本」の方を傷つけるような言動をしないでください。「本」「読者」「スタッフ」に対する迷惑行為が見られた場合、退場していただく場合があります。
2. 主催者並びに「本」及び同席者に無断で、写真撮影や録画、録音はしないでください。
3. 「本」の方の個人情報を許可なく、ネットや印刷物にして公開しないでください。
4. 「本」の方の身体的・精神的都合で閲覧中に貸し出し中止になることもあります。
5. スタッフ及びメディアが写真撮影や取材に伺うことがあります。写真に映ることや取材を避けたいという方は受付（又はその場）でお申し出ください。

ヒューマンライブラリー2022 タイムスケジュール

教室/机番号	第1回 12:45- 13:15	第2回 13:30- 14:00	第3回 14:15- 14:45	第4回 15:00- 15:30	第5回 15:45- 16:15	交流会 (N313) 16:30- 17:30
N310/311	関根摩耶 (online)	関根摩耶 (online)	中嶋秀昭 (online)	長谷川留理 華(online)	長谷川留理華 (online)	朴梨香 長江春子 浜田有子 ひらり～ 畑野とまと 小山祐介 りゅ～や
N312	ソン・サンギ (online)	ソン・サンギ (online)	朴梨香	朴梨香	朴梨香	
図書室	—	長江春子	長江春子	長江春子	大谷重司	
礼拝室	アガリン	浜田有子	浜田有子	—	浜田有子	
N313①	—	ひらり～	ひらり～	ひらり～	—	
N313②	—	畑野とまと	りゅ～や	畑野とまと	畑野とまと	
N313③	小山祐介	—	小山祐介	—	りゅ～や	

* 会場配置図 (北講義棟3階)



*長谷川ルリカさんは欠席。朴梨香さんは、欠席のため、金希玲さん、鈴木郁絵さんに交代。

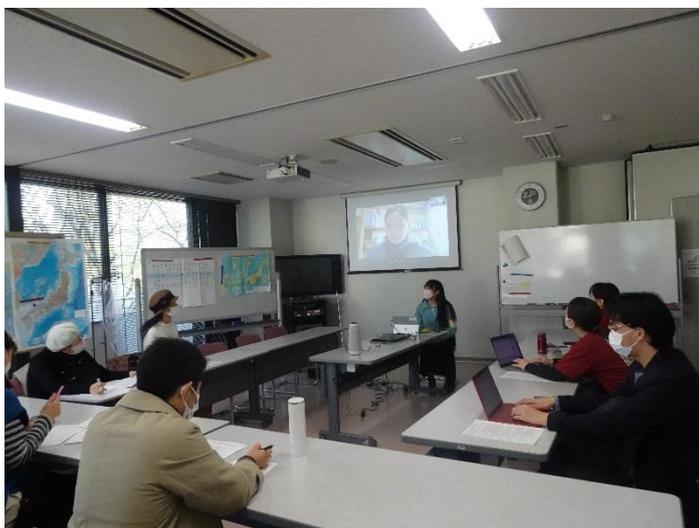
当日の写真



受付 (N棟3階)



小山祐介さん (N313)



関根摩耶さん (N310/311)



Agalin Nagaseさん (礼拝室)



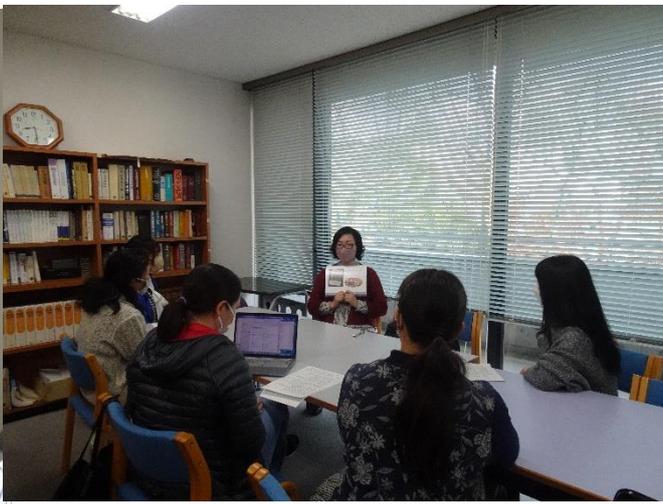
ソン・サンギさん (N312)



金希玲さん (N312)



りゅ～やさん (N313)



長江春子さん (図書室)



中嶋秀昭さん (N310/311)



浜田有子さん (礼拝室)



畑野とまとさん (N313)



大谷重司さん (図書室)



↑全体交流会（N313）

全体写真↓



準備と当日までの活動

- ・7月20日(水)昼休み 第1回実行委員会 N313

スタッフの参加： 岡智之、金子先生（オンライン）、野月そよか、鈴木郁絵、佐野和佳子、君和田真澄、蘇施源、佐野昌子、篠原陽人（オンライン）、小宮澄夏（とその友人）

日程とオンライン開催の決定、「本」の選定

・8～9月 本との打合せ、後援団体（小金井市教育委員会・社会福祉協議会）、協賛団体（大学教職員組合）の決定など

- ・第2回実行委員会：2022年10月26日（水）昼休み N313

参加者： 岡 智之、野月そよか、鈴木郁絵、佐野和佳子、小宮澄夏、君和田真澄、蘇施源、劉士尊、彭越（下線オンライン）、説明会参加：板坂、江郷（A社1）

当日スケジュール、宣伝方法などについて話し合う。

・11/1（火）Microsoft FormsWEB 申し込みを開始。学芸大学ホームページ、学芸ポータル、留学生ML、異文化間教育学会MLなどで宣伝。

- ・12/7（水）昼休み N313 第3回実行委員会 当日のスケジュール、役割分担の打ち合わせ

当日スケジュール

- ・11時半 スタッフ集合（N棟3階）打ち合わせ、会場準備（張り紙、受付準備、会場机配置など）、案内板設置、受付シュミレーション（名簿で名前チェック、プログラム渡す、場所・時間の確認）
- ・11時40分 正門前 弁当受け取り（蘇／劉）
- ・12:15-12:45…受付開始(君和田/彭越/小宮)、外案内…N棟前(仲村)、正門前(蘇)、S棟前(劉)
- ・12:45以降…受付、各部屋スタッフ配置、タイムキーパー
- ・16:15- 交流会準備 N313（全員）—8のテーブル作る、「本」と担当スタッフが座る
- 17:30- 最終片付け（全員） 18時までに解散

反省会議

日時：2022年12月14日（水）12:10-12:40

参加者：岡、君和田、劉士尊、彭越、鈴木、佐野和、蘇シゲン、江郷、板坂

1. 参加者数

参加者 総計 54名 読者 27、本 13、スタッフ 14

- ・読者内訳：学生 12（学芸大生 11（留学生 5）、他大学学生 1）、学芸大教職員 3、他大学教職員 4、一般 8

★ 去年に比べると参加者数は減少した。対面形式に変わったため、外の一般の参加者は減ったかと思われる。ただ、スタッフは2倍に増えた。

2. 日程、スケジュール「について

- ・ 2019年以来の久々の対面形式で、時間的にはちょうどよかったのではないか。

3. 「本」の設定について

- ・今回、本が過半数入れ替わり、新しい本が7冊開拓できた。新鮮感があった。
- ・新しい本と事前に司書と ZOOM で打ち合わせ、リハーサルができたのがよかった。（アガリンさんのみできず）

4. 広報・宣伝について

- ・ 学内ポータルや学会の ML から来ていたが、やはり、先生・知人の紹介というのが大きいと思う。口コミが重要である。小金井市報で来た人は 1 人程度。

5. 当日の運営について

- ・ 準備…弁当がスタッフ分用意していたが、本は 2 回目以降が多かったので準備しなかったが、本が食事をしていない人がいたので弁当を追加注文した。2 回目までの本には弁当注文すべき。
- ・ 受付…本の顔がわからなかったので、対応できなかった。本の写真があればよかった。これからは本用の受付を作っておくといいのでは。
- ・ 各教室・セッションでの問題…オンラインでは目が合わなかった。本、スタッフの名札があればよかった。15 分の余裕があったのでよかった。N313 で読者が多いグループと少ないグループがあって、気を使った。
- ・ 交流会…集まって移動する人がいなかった。自由に移動する機会を作ればよかった。
- ・ 予算…今回、教職員組合の協賛金 1 万円だけだったので、弁当、お菓子、お茶、交通費などの費用は足が出た。カンパも 1 円もなかった。

7. 今後の予定

- ・ 報告書の作成…読者アンケートの集計、スタッフの感想文 12 月中、野月さんの GR
- ・ 対面+オンライン（ハイブリッド）もしたほうが、人数が増えるのでは。オンラインの本にはオンラインの読者も可能にすれば。機器の問題や操作の手間なども考え併せて今後ハイブリッド開催も考える。
- ・ 春学期に、小さい規模でヒューマンライブラリーをやる。

読者アンケート

読んだ「本」の名前と感想、「本」へのメッセージをお書きください。

関根摩耶さんへ

- ・ 本日は貴重なお話をありがとうございました。二風谷で育ったこと、アイヌの世界観や関根さんの生き方、考え方に触れることができ、大変勉強になりました。本で知るのではなく体で知ることは、本当に大切だと共感しました。仕事で言葉を扱っているので、言語観について改めて考える機会をいただきました。参加できてよかったです。二風谷にも行きたくなりました！またお会いできるのを楽しみにしています。
- ・ アイヌ語を生で聞くのは初めてでした。アイヌの世界観にも触れることができ、何とも不思議かつ、現代人が忘れかけている自然との共存の大切な考え方・生き方を思い出させてくれるような気持ちになりました。アイヌ語やアイヌ文化・思想のルーツや歴史をもっと知りたくなりました。本日は貴重なお話をありがとうございました。
- ・ 本やメディアでしか知らないアイヌの方々の暮らし、考えを知ったことが良かった。ご自分たちの文化、アイデンティティを大切に、次世代へ引き継ぐ姿勢が素晴らしいと思う。
- ・ アイヌの中にある考え方について知ることができ、たいへん有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。
- ・ アイヌの世界観から、普段「当たり前」と思って暮らしている現代社会を見直すよい機会になりました。アイヌ語で「考える」は「魂を揺らす」と言うというのは、とても素敵ですし、考えるというのはそうあるべきものだと感銘を受けました。

- ・ 文字文化について考えさせられる時間でした。アイヌには「差別」や「自然」、「民族」や「人権」という言葉がないという言葉が印象的でした。抽象的な概念や比較のために生まれた言葉はないということで、今までどっぷりと文字文化に浸っていた私にとって、言葉一つ一つについて考える充実した時間でした。また、アイヌについて本で勉強しないという言葉も印象的でした。教科書で離された存在としてアイヌを語られ、疎外感を感じられたというお話を聞き、きっと言われていなかったら、陥ってしまっていたな、と思い、どのような伝え方があるのか、勉強の仕方があるのか、考えていけたらなと思いました。
- ・ ご自身の生き立ちや育った環境を通してのアイヌ文化の吸収と現在のアイヌ文化紹介に至った経緯を丁寧に語られていた。本土の私達の文化や考え方との違いが判ったし、アイヌの方々が自然をより身近に考え、共生してきたのかが良く判った。考え方や物事の多様性を感じた。
- ・ 生まれたのは北海道だが、親はそれぞれ完全にアイヌにルーツを持っているわけではない方で、その中でもアイヌにかかわる地域で生まれ育ってきた関根さんはとてもアイヌについて詳しく、アイヌをもっといろんな人に知ってほしいをいうのが画面越しでも伝わってきました。
- ・ 関根摩耶さん、民俗に関わるお話は、どこか異なる文化をもった人々として自分の生活に引き付けることができずにいました。しかし、関根さんのお話をお伺いして、急に自分が関係ある話として捉えられるようになりました。アイヌの持つ「いろあざやかさ」は、あらゆる分断、分類を根底から問い直す力があると思いました。「責任をとれる言葉」、逆に現代における「責任をとれない言葉」に注意しながら生活してみようと思えています。

ソン・サンギさんへ

- ・ 在日コリアンの方への差別や嫌がらせがこんなに酷いものだとは知らず、啞然としました。。
自身のアイデンティティーが揺らいでしまうというのは、本当に辛いことだと思います。どうしてこのような差別意識が生まれるのか、そして、どうしたら差別がなくせるのか、もっと考えてみたいと思います。本日は貴重なお話をありがとうございました。
- ・ 在日の方と接する機会があり、メディアなどでも置かれた環境は知っていたが、直接話しを聞くことで共に暮らす社会を作ることを考える機会になった。歴史を含めて相手の背景を知ることが必要だと思う。
- ・ ご自身の人生経験と在日朝鮮人であることへの思いの移り変わりが大変興味深かったです。また、留学同について何も知らなかったので、勉強になりました。
- ・ ご自身の生き立ちの中で、感じて来た葛藤や自己否定の話がとても印象的でした。と言うのも、現在公立学校に通っている子ども達の中で、海外に由来のある子ども達のほとんどがソンさんと同じ様な言動を取っており、興味深かった。また質問にも答えて頂き、「今は、判らなくても大きくなって判る時が来る。自分の事を気にしてくれる大人が居るだけで違うから、諦めずに語りかけてあげて欲しい。」と言われたのが印象的でした。やはり、諦めずに続けることの大切さを確信した一言でした。有難うございました。
- ・ ソンサンギさん：朝鮮人学校、普通科高校ともに通われ、大学にも行かれた人ならではの双方をしる強みを生かしたお話を聞かせていただくことができました。「在日朝鮮人」としてのアイデンティティーのお話 在日朝鮮人として生まれたと言うだけでこの社会では自己肯定感が低くなってしまふ現実はおかしいと思ったし私が無意識に差別をなくすと考えていてもなくなる根深さ、勝手に被害者となってしまう子が生まれてしまう社会の問題点に気づくことができた

金希玲さんへ

- ・ キム・ヒリョンさんのことについて聞いて本当に良かったです。幼・小・中・高と在日朝鮮人学校に通われていて、大学に入った時、カルチャーショックがあったというお話が一番印象的でした。「社会的に存在していないものだとつきつけられた」ことや「朝鮮人ではなく、韓国人だと言いたい時期があった」という言葉から在日朝鮮人として生きていく生きづらさを感じられたのだと考え、そのような状況をつくった一人かもしれない自分にモヤモヤしました。私には何ができるのか、少しでも在日朝鮮人についてその歴史や状況など周りの人に伝えていけたらと思います。在日コリアンという言葉がオブラートに包まれた言葉だということを知れたことも大きな収穫でした。
- ・ 留学同という在日朝鮮人の学生団体の話を聞きました。在日朝鮮人という言葉やその背景などが知られていないから存在が当たり前認められていないという話を聞いて、ヘイト行為をしないことと無関心でいることは違うのだと感じました。また、朝鮮人でいつづけるためには朝鮮人でいようとしなければならない今の状況を聞き、留学同のような朝鮮について学べる場や同じルーツを持った人たちが集まれる場がとても大事だと知りました。在日朝鮮人に歴史や現状について私自身も学ぶ必要があると感じました。詳しく話してくださりありがとうございました。
- ・ 金希玲さん、まだ見えていないけど、確かにいる朝鮮人学生を「とりこぼさない」という強い意志に感銘を受けました。声を上げやすい環境は全ての人が力を合わせて徐々に構築されていくものだと思うので、現在活動されている方にすべてをお任せするのではなく、私にできることを探していこうと思いました。

鈴木郁絵さんへ

- ・ 第5回で朴さんの代役をされていた鈴木さん（合っていますでしょうか）。在日朝鮮人と聞いてこれまでイメージしていたのは、望んだわけではないけれどその境遇にあったが故に差別や偏見にさらされてきた方、という風にすごく勝手な想像をしていましたが、鈴木さんが在日朝鮮人というアイデンティティを選び取ってこられた過程は、そうしたものとは全く違っていて驚きました。韓国と朝鮮に対する異なる感情、留学同についてなど色々教えて頂き、一日本人として、もっと知りたいなと思いました。
- ・ 留学同の存在を初めて知りました。ご自身が高校1年まで朝鮮系の家系であることを知らず、それ以降、そのアイデンティティに生きてこられた半生について熱く語られているお姿がとても印象的でした。何とか日朝・日韓関係の改善につながるムーブメントとなられますよう、ご活躍を願っています。

長江春子さんへ

- ・ 中国残留日本人孤児のことは聞いたことがあるし、日本語教育が行われていることも知っていましたが、実際の帰国前後のご家族の生活実態、いじめ、言語などの問題は初めて知りました。差別やいじめが起こらないように、まずは教育現場での教員や学生への教育と理解を促進させる必要があると思いました。様々な背景の人々が共存しやすい多様性に富んだ社会が早く実現してほしいと改めて思いました。そのために、自分が何ができるか考えていきたいと思

ます。そして、私も長春に何度か行ったことがあるので、満州国時代のことをもっと勉強しようと思っています。本日は貴重なお話をありがとうございました。

- ・ 「中国残留孤児」という言葉の意味を何も考えずに耳にしていたが、それがどういうことであるのか、そしてなぜそれが正しくないのか、ご自身のライフストーリーとともに説得力のあるお話を聞かせていただき、とても勉強になりました。
- ・ 中国在留日本人戦争孤児2世の方からお話を聞く機会は初めてだったので、とても充実した時間でした。国家や大人、政治に翻弄され、中国でも日本でも居場所がなかった経験、役所での対応などが衝撃的でした。そんな中でも、長江さんが論文のテーマを変えて、中国残留日本人戦争孤児について研究したことや青年海外協力隊での経験をきっかけにこの宿命を逆手にとって生きていくと決意したところなどを聞き、長江さんのすごさを感じました。長江さんが最後におっしゃっていた、「言葉が独り歩きをして、色メガネで自分を見てくる。ラベリングされる側の気持ちを考えて」という言葉を受け取り、正直モヤモヤしています。社会科の教員を目指すものとして、満蒙開拓記念館に訪れたり、満蒙開拓について、その後の逃避行について、日本政府が満州に送っておいて、見捨てたことについて学んできたりしたつもりですが、一人一人の苦しみや歴史があることを踏まえると学んできたものすべてが当てはまることはなく、授業においてコンパクトにまとめることなんてできないと感じました。果たして、どう伝えていけばいいのか。その伝え方によって、ステレオタイプやラベリングすることにつながるのではないか。様々なことにモヤモヤさせられた時間でした。話してくださりありがとうございました。

- ・ 長江さんのお話は、全てに関して納得が出来ました。それは、自分が社会科教師として多少の知識があったからだと思います。帰国されてからのご苦労も並大抵でないと容易に考えられません。学校でのいじめや親の介護、自分と共通するところもあつたりで、本の中では身近に感じる部分が多かったです。今回、素晴らしい本に出合えて感謝すると共に、勇気をもらいました！有難うございます♡
- ・ 中国残留孤児という言葉は間違っていて正しくは中国残留日本人戦争孤児という言葉だという話を聞き、歴史をちゃんと知らない現状が言葉にまで表れていることに戸惑いました。これまで何となく避けてしまい戦争の歴史を学ぼうとしてこなかったのですが、お話を聞いて歴史を知らないことが差別や拒絶につながってしまうと知り、戦争の歴史も学ばなければならないと思いました。学ぶときには、ただの出来事や数字ではなくそこに巻き込まれた人たちの存在をみていこうと思います。辛い体験を共有してくださりありがとうございました。
- ・ 長江さん、「中国残留孤児」という言葉に秘められた、日本の自分がしたことに対する無責任さが、非常に恥ずべきものだと感じました。責任をとらず都合悪くなったら見捨てる、そんな日本という国の行ったことは到底許されることではないし、後世に語り継がなければならないものだと思います。歴史を教えるときなどは、その事実だけでなく、その際に起きた事象と人間の関係をきちんと伝えられるようになりたいです。
- ・ 長江春子さん、長江さんの壮絶なご経験が、語りを通してひしひしと伝わってきました。お恥ずかしながら「中国残留日本人戦争孤児」という言葉を正しく理解していませんでした。その言葉に伴う、生きづらさや経験や社会課題を想像できていなかったのだと自覚しました。私は、あらゆる課題を抱える方の気持ちを理解しきることはできませんが、それでもお話を聞き、知ろうとすることはできます。目をそらさず、積極的に情報を集めるとともに、友人たちとも話してみようと思います。

Agalyn Nagase さんへ

- ・ DV や貧困に苦しめられている女性に対しての支援の詳しいことについてと、その行動をした理由や背景を知れてよかったです。別に自分が体験したからほかの人を助けなければという理由ではなく、一人の女性が公園で泣いていたのを見たからというのを理由として手を差し伸べるという行動にとっても心を動かされました。
- ・ アガリンさん、この度はお話して頂きありがとうございました。難民について知っていましたが、やはり実際に経験された方の話を聞くのは重みがありました。他にも DV 経験という点でも経験者の話というのは滅多に聞けないものであり、自分自身の生活、周りの生活についても見直そうと思うきっかけになりました。
- ・ アガリンさん：移民女性の問題としてお話くださり、私が今まで気がついていなかった、当事者視点での話、移民当事者だからこそその問題を話してくださり私自身の視野の狭さ、現状認識の拙さを突きつけていただくことができました。現実の過酷さに直面しながら奮闘されている姿を見て心を打たれ、気持ちを新たにできました。

中嶋秀昭さんへ

- ・ 去年と今年と続けての読書でした。去年は、難民キャンプでの様々なデータの表示があったのですが、今年は動画でのキャンプ内撮影があって、とても興味深かった。また、キャンプの今が良く判った。政府からの援助を受けている以上、政府の意向にある程度従わないといけないジレンマや、衛生面・学校の教育の話などを聞きました。以外だったのは、コロナ対策でワクチンをきちんと受けれていた事。それよりも一般的な病気や衛星教育の方が大変なことを伺い、ビックリした。また、来年も続きを読みたい本の一冊です。

- ・世界の医療団ということで感染症を治したり、栄養失調の人を治療したりなどを想像していたが、それだけでなく、難民キャンプにいてあんまり体を動かさないということから生活習慣病予防のため体を動かす練習も教えたりしたことに驚きました。

りゅ～やさんへ

- ・本日は貴重なお話をありがとうございました。パートナーの方との暮らしや彼のお父さんのこと、家族になっていく様子が伝わるお話しでした。周りの方の理解があったのもりゅ～やさんのお人柄かと思います。パートナーシップ制度や養子縁組など社会的理解と法的な制度についても触れていただき、理解が深まりました。ファミリーシップ制度についても触れていただき、これからの家族の多様性にも考えるきっかけとなりました。ありがとうございました。
- ・一番の印象は、りゅ～やさんのお人柄が非常に素晴らしいからこそ、パートナーのお父様も同居を有り難く受け止められたと思った点です。もちろん、そういうお人柄に、20歳ほど年上のパートナーさんも惚れたのでしょう。本当に素晴らしいお話を聞かせていただきました。
- ・りゅうやさん、思わず人生相談をしてしまうような、人の心を開かせる優しさ、おちつき、包容力のようなものをお持ちでした。恋人だけでなく、家族愛も感じるお花でした。ひらりさん、わかっているようでわかっていなかったトランスジェンダーについて、パワポでの説明がわかりやすかったです。
- ・りゅ～やさん、りゅ～やさんの周囲に居られる人々の温かさを感じました。それは、一重にりゅ～やさんのお人柄や努力によるものだと思います。人と人の信頼を繋ぐものは何か、改めて問い直すきっかけとなりました。

畑野とまとさんへ

- ・心の性とは何か、深く考えさせられました。

- ・ 「心の性」という目に見えない話を分かりやすく、政治や教育、さまざまな社会の仕組みの中に位置づけてお話下さり、とても勉強になりました。トランスジェンダーのことだけでなく、本当にいろいろなことを勉強して考えていらっしゃって、とてもよい刺激になりました。
- ・ アイデンティティとは、性別とは何かを改めて考えることができました。たいへん興味深い話を聞くことができました。ありがとうございました。
- ・ TRANSGENDR JAPAN 共同代表者としての強烈なまでの大切なメッセージが心に響きました。アイデンティティの重厚なお考えを学術的にも深めておられ、誰もが納得する議論をされていて、本当に感銘を受けました。アイデンティティに苦しんでいる人は多くいます。ますますご活躍頂きたいと願っています。
- ・ 畑野とまとさん：トランスジェンダー活動家として世間からの目にさらされても活動し、信念を持って動き続ける姿、目先の問題解決だけにとらわれない活動、根本からひとりでも多くの方が差別されることなく行きられる社会を目指す姿勢に感銘を受けました。社会を見て、差別を是正するための教育、教育学、社会学の視点で深く追求しようと思うきっかけになりました。

ひらり～さんへ

- ・ 複数のマイノリティ性をもつ LGBT について解説していただき、大変勉強になりました。
- ・ トランスジェンダーと性同一性障害の違い、シスジェンダーという概念、など初めてしっかりと認識できました。ご自身の苦しみが見た目的にも情情的にもわかりにくいだけに、本当にご苦労をなさってきたことに心を動かされました。惜しみなくお話くださってありがとうございました。

- ・ パワーポイントを使ったお話が本当に印象的でした。娘にカミングアウトした時のお話しや校長先生の対応など本当に興味深かったです。
- ・ 「ダブルマイノリティ」という言葉について知れました。私の学科ではLGBTQについて触れる機会も多く、その中ではその言葉は聞いたことありませんでしたが、「ダブルマイノリティ」についてもっと熟知するためには私にはもっと時間が必要だと思いました。
- ・ 見た目や中身を、無意識に勝手に判断していることに気づかされました。トランスジェンダーとLGBは1人につき一つではなく、いろいろ組み合わせられていることも知りました。性的マイノリティの人たちはお互いのことを理解し合っていると思っていたので、多数派や少数派に関係なくその中でも排除が起こっていることに驚きました。ですが、よく考えれば性別や恋愛対象のことに関係なくどの分野でもこうしたことは起こっているのに性に関わる時だけ別で考えてしまっていたのだとわかりました。こんがらがりやすい性の多様性の説明をスライドで工夫してやってくださりとてもわかりやすかったです。お話を聞かせてくださりありがとうございました。
- ・ ひらり～さん、私の中にあるわずかなイメージが様々変わりました。特に「名前のような感覚」で自身の体に関する話をしていたことが非常に印象に残りました。妙に腑に落ちて「性別」というしがらみに雁字搦めにされている自分自身が嫌で、変わろうと決意しました。
- ・ ひらりーさん：セクシャルマイノリティとしての立場から想像されてしまうような役割演技にとらわれることなく様々な視点から多くのことについて追求する姿勢、社会の常識にとらわれることなく自分の信念を持ってうごく姿に驚嘆しました。

大谷重司さんへ

- ・ 50歳過ぎてからの、ベンチプレスへの挑戦の軌跡についてお話くださり、とても勇気を得ることができました。また、懇談会の席上において、具体的なトレーニング方法を教えていただき、自分自身も大会に出る夢を得ました。公共図書館において、視覚障害者用のサービス提供が、ニーズとあっていないという点は、研究の上でも役立ちました。今後、スマートフォンのアプリを使いながら、健常者と同じ本を図書館で読んでいきたいというお話につきまして参考になりました。
- ・ 目が見えないことや耳が聞こえないことが大きなハンデにはならないベンチプレスという競技の話を知りました。目が見えない人も見える人も一緒に大会に出ると聞き最初は驚きました。ですが、全てのことに目が見える人と見えない人を分ける必要はなくて、同じようにできることもあるのだと気づくことができました。一緒にできることをもっと探して見つけていけばお互いに分かり合えたり助け合えたりできるようになるのではないかと思います。考え方が変わる話を聞かせてくださりありがとうございました。
- ・ 今回担当した本の方は大谷重司さんです。大谷さんは目の不自由な方として、さまざまなことで活躍していることを知って、私にとってすごく励みになっています。目が見えなくとも、さまざまなことができるんだということです。では、私たちなんの不自由もない人たちにとって、もっと強く逞しく生きるべきではないかと思っております。大谷さんへの一言メッセージ:今日はお話できてすごく楽しくて、励みになりました。もし機会があれば、ぜひ中国にいらっしゃってみてください！

小山祐介さんへ

- ・ ご自身の鬱の経験に客観的な考察も加えながら振り返ってお話下さり、勉強になりました。きっとこのようにお話しできるようになるまでに乗り越えたものが多くあったのでしょうし、今も勇気のいることだと思います。お話下さり、どうもありがとうございました。
- ・ うつ病へのプロセスとその回復プロセスを詳しくリアルにお話くださって、心から感謝します。ヘルプの手を出してほしい、それが人とつながっている思いにつながり、回復への道となる、というお話をしっかり受け止めたいと思っています。
- ・ 話を聞いて、からだも心も休むことがとても大切なのにそれを許してくれない現実があることを感じました。また、そうした状況から救ってくれるのは人だということを聞いて安心しました。なぜなら、家族や友だちで心配な人がいたときに、その人が声をかけられるのを嫌だと思っていてよりストレスを感じていたらどうしようと不安だったからです。相手に愛情を持って接したり、軽く声をかけてみたりすることをためらわずにしていこうと思います。自分の行動や経験を良いも悪いも話すことはとても勇気がいることだと思います。そうした話はなかなか聞けない貴重なものです。今回はお話をしてくださりありがとうございました

浜田有子さんへ

- ・ 本日は貴重なお話をありがとうございました。失語症がどういうことなのかは理解していますが、直接お話を聞く機会がなかったので、お話が聞けて大変勉強になりました。どのように見えて、どんなことが言えないかなどわかりやすく説明してもらえて、わかりやすかったです。ご紹介して頂いた YouTube も見てみたいと思います。ありがとうございました。

- ・ 今日はお話ししてくださりありがとうございました。父が失語症者であることもあり、浜田さんのお話しとても楽しみにしていました。父も 10 年後には浜田さんと同じように話せるようになっていないのではないかと少し希望が湧いてきました。
- ・ 自分の知らない未知の世界の話でしたが、引き込まれました。失語症とは、言葉だけでなく、色々な症状を伴う場合が多いこと。また、見た目が一般と変わらないので、気が付きにくく、それによる軋轢が生まれ易いことや理解されにくいことがお話からよく判った。浜田さんとは、住まいが同じ地域のようなので、今度ばったり、会うかもしれません。その時は、宜しくお願ひします。
- ・ 浜田さん、失語症及び半盲症というのは本日初めて聞きました。本当に初めてのことばかりで参考になりました。自分が知らないということで、他の人に不便を与えているのかもしれないと思うと、様々な分野の知識をいれなければならないなと思いました。互いが互いを支えあえるような関係をつくることができればいいのかなと思います。
- ・ 浜田有子さん、失語症の困難さをユーモラスに話す浜田さんから元気をもらいました。失語症の方が持つ感性とといいますか、世界の見え方というものが、そうでない人と異なる豊かさにあふれているという気がしました。またお話を聞けることを楽しみにしています。
- ・ 小山さん、ひらりーさん、長江さんのお話を伺いました。みなさん、想像を絶するご苦労されたお話を伺いました。お一人 30 分の枠では聞ききれず、まだまだ色々と伺いたいところです。お三方共、現在は、お幸せに過ごしていらっしゃるということで、ホッとする気持ちです。LGBT について、自分が単純化して理解していることに気付かされました。

本ヒューマンライブラリーの運営（スタッフの対応、会場の環境など）、その他についてご意見がありましたらお書きください。

- ・ このような素晴らしい会を定期的で開催していただきまして、本当にありがとうございます。普段接することのない方のお話が伺えて、自身が知らない事実を当事者から直接聞くことがで

きて、不勉強に気づくとともに、世界が広がり、知識や理解が深まる体験ができました。今後とも、また機会がありましたら、是非とも参加させていただきたいと思います。

- ・ スタッフの方々には丁寧に対応して頂きました。初めて学内に入ったので外に案内係がいてありがたかった。
- ・ スムーズな運営、どうもありがとうございました。
- ・ この度は貴重な機会をありがとうございました。ご尽力くださったことをただただ感謝するのみです。また来年も企画して頂けると幸いです。
- ・ とても充実した時間でした。本当にありがとうございました。
- ・ ありがとうございました。暖かく親切な感じでした。
- ・ 皆様、とてもフレンドリーで会場の雰囲気も良く、ご本に依って熱心に質問が交わされていて活気がありました。やはり、私は対面の方が本からの熱意を汲み取れる気がして、Webよりも好きです。ただ、遠方の方も参加し易いので、参加者人数によっては両方でのライブ開催があっても良いのではないかと思いました。
- ・ 来年のヒューマンライブラリーの運営にかかわってみたいです。

読者の感想文

ヒューマンライブラリー感想

私は関根摩耶さんのセッションと畑野トマトさんのセッションに参加しました。関根さんからは、授業で聞いたアイヌの考え方や生きてきたなかで大事だと感じたものについて聞いた。神と人が対等な関係であるという考え方は今まで生きてきた中で触れたことが無い考え方であり興味深かった。人間の世に来た神をもてなすと「人間界はよかった」というロコミが神の国に広まり、もっと獲物が取れるようになる、という考え方が個人的にはとても好きだった。また、「人は尊敬されなければ人として扱われない」「アイヌ＝（尊敬される）人」という話も印象に残っている。手先が器用で道具がつかれるだとか、狩りの時に働いているだとか様々な行為によって尊敬される人でいなければいけないという価値観が素敵だなと感じた。しかし、学校現場において椅子に座れない理由が「椅子の魂」と言われてしまうとどうしていいかわからないと思った。今後の課題にしたいと思っている。

畑野さんの話を聞いて感じたのは「アイデンティティの定義の難しさ」だった。自分の性については結局のところ「今までの経験の積み重ね」であり、好きなものや違和感などから定義することは難しいと感じた。実際に当事者の話として、「用いられる『違和感』という言葉は何なのか」を聞くことができたのはとても有意義に感じている。また男性から女性になった場合に公衆浴場で云々、といった理由で反対をする人がいることや日本国内でのジェンダーギャップについての話も印象に残っている。

今回の企画で自分がいままで本や文字でしか知らなかった情報が実体験を伴う声として聴くことができたのはとても有意義な体験であったように感じる。また機会があれば参加したい。

ヒューマンライブラリー2022 感想

私は今回のヒューマンライブラリーで4冊の本に出会いました。

一冊目は移民女性を支援している「Agalyn Nagase」さんです。彼女から読みとった内容はとても想像しがたいほどのひどい被害にあわれた移民女性の方々の体験で、恐ろしかったです。何年も前の話で、日本人のDV夫が移民女性である妻を殴ったりけったりして警察が来ても「これは家族の間のトラブル」というのを理由に移民女性を助けられなかったり、移民女性とその子供をマンションの上から突き落としたりと、とてもひどいものでした。そのような女性の話を聞き、行動に示すというAgalynさんは、とても素晴らしいです。人はやろうと思っただけですぐに行動に移すというのはなかなかできないものです。そのAgalynさんの素早い行動のおかげで、何人も多くの女性を救えたことでしょう。

二冊目はアイヌにルーツを持つ「関根摩耶」さんです。私が漫画の「ゴールデンカムイ」でアイヌのことについて知ったし、また興味を持ちました。そのため、関根さんの本を読みたいと思い、選ばせていただきました。「ゴールデンカムイ」では明治時代末期ぐらいのアイヌについてでしたが、現在ではどうなっているのかと気になりました。関根さんが小さいころ、常に自然が周

りにあったことから自然から人間について学んだという、私が小さいころとは異なる人生の歩み方をして聞いていてとても興味深かったです。関根さんが、自分がアイヌでよかったという誇りを、話を聞いていてよく伝わってきました。

三冊目は世界の医療団としてロヒンギャ難民を手助けしている「中嶋秀昭」さんです。私は高校生の時に東京企業官公庁訪問という行事で、ユニセフハウスに行く機会がありました。そこではどのような支援を行ったのか、実態作っているテントはどうなのか、被害にあわれた方はどのような武器でけがをしたのか、どのようなものを持っているのかなど、具体的なものを見てきました。そこで国際協力に興味を持ち今回の本として選ばせていただきました。私はてっきり感染症などを治すために派遣されたと思いきや、実はそれだけでなく、生活習慣病の予防も行っていることに驚きました。難民キャンプでは部屋が狭く、あまり動き回らないため、生活習慣病になりやすいとおっしゃっていました。なので、狭いところでもできる簡単なストレッチを教えるなど、私たちが普段意識したことないことも教えていました。

四冊目はトランスジェンダーとレズビアンのだブルマイノリティをお持ちの「ひらりー」さんです。私は自分の学科で何回かLGBTQについて学んだことがあります。ダブルマイノリティという言葉を知るのは初めてでした。ひらりーさんは、見た目は男、心は女というトランスジェンダーですが、好きな人は女性と、レズビアンでもあります。これはとても考えさせられました。見た目は男、好きな人は女性だと、多数の男性と同じですが、心が異なることで新たなマイノリティがございます。ここで私は「心」と「好きな人」はいつも同じわけではないということがわかりました。

今回のヒューマンライブラリーでは、授業で受けたことのあるものを+αで学ぶことができ、とても貴重な体験でした。もっとより多くの人にこのヒューマンライブラリーを知ってもらいたいと思っております。

ヒューマンライブラリー感想

先日ヒューマンライブラリーのイベントに参加し、それまで触れたことのない様々な方との出会いの機会をいただき、すごく貴重な経験だと思えます。

私はいつも、人間は誰でも読まれる価値のあるユニックな本であり、すべての人はひとりひとり自分らしく生きるとよいのではないかと考えています。研究活動において、分類することが重要な手段かもしれないが、人間社会において、人はなぜ明確に定義されたり、カテゴリーにされたりして生きていなければならないかわかりません。人間社会のマジョリティーと見なされる私であっても、生活での定義されたことに困り、ネガティブなタグもポジティブなタグも、心や行為を束縛する存在になりやすいと思うのです。例えば、ひらりーさんや畑野さんに「自分の心は男性か女性か」、長江さんに「自分のアイデンティティについては中国人か日本人か」と質問するのは、人を乱暴に定義しようとしたことではないでしょうか。男性と女性の定義はそもそも何ですか、人は所属文化を一つ選ばなければいけないのですか、それらの基本的な問題にまだ疑問があります。今回のイベントを通して、本とした方がそれぞれ属しているマイノリティーの現状や問題を部分的に知ってきたが、私は実際に聞かせていただいたのは、アイヌ、LGBTQと中国残留日本人孤児というようなある団体の代表的なお話ではなく、関根さん、ひらりーさん、長江さんと畑野さんの、独立の人間としてのお話だったと思えます。

具体的なお話について、マイノリティーへの偏見や差別があることは前から知っていますが、み

なさんの実際の経験を聞き、マイノリティーとしての辛さを初めて真切に感じました。自分らしく生きたいというのは、人間として基本的な権利だと思いますが、彼らはこんな小さな願望を実現するために、大変苦勞を重ねています。もっとも印象的なのは長江さんのお話でした。中国に残られた日本人孤児のことについて、専門書で読んだことがあります。しかし、冷たい文字より、本人の自叙は聞き手の私の心に強く響きました。差別問題はどのような国においても厳しい問題だと実感しました。中国の学校でも日本の学校でも、クラスメイトに認められなかったり、ひどい話で虐められたり、私は同じ立場になったらどうすればいいか、想像するだけで怖くて悲しい気持ちになってしまいます。戦争のせいなのに、無辜の個人、特に婦人や子供たちにその結果を負担させるなんて、アンフェアではないでしょうか。普段私たちはいつも「世界平和を祈る」を口にするが、長江さんがこの願望を伝えた時、この話の重さを感じました。

社会の偏見が悪意によって故意に作ったものではないと信じており、その中の多くは、あるマイノリティーについてよく知らないことから生まれると考えます。それで、ヒューマンライブラリーなどの活動は社会にすごく甲斐があります。このような活動を通して、人たちはマイノリティーの方のことにもっと理解できる一方、世の中には様々な人間が存在していることがわかり、一人一人の生き方を尊重する姿をとって生活することもできるかもしれないと思います。

ヒューマンライブラリー感想

ヒューマンライブラリーとは何のことだろう、と最初に聞いたときは戸惑いました。人間 図書館？そんなことが可能なのか！？・・・可能でした。むしろ紙ベースの本にはない世界 が広がっていました。紙ベースの本を読むことも新しい価値観を広げてくれますが、本から の一方通行です。(後に同じ本を読んだ人を見つけ、語り合うのなら別ですが)しかし、ヒューマンライブラリーは、本から一方通行ではなく、読者・語り手など、自分も含めその場にいた人全員から情報を受け取ります。また、実際に人とコミュニケーションをとったり、質問したり、議論したりします。その分、自身の感情の動きや思考をたくさん使うので紙ベースの本では経験できないことができます。ヒューマンライブラリーを通じて学んだことが大きく分けて2点あります。第一に、読み手にとってそれぞれ受け取り方が異なるということを実感しました。同じ話を聞いても、人によって質問する部分や反応の仕方が異なるのだということ学びました。一体その違いはどこから来るのでしょうか。それは同じ人間がいないように、人によって経験や持っているバックグラウンドが異なるからだと思いました。その人がどこに興味を持って生きてきているのか。質問や語りはその人の内面を映し出す鏡のようなものであるということに驚きました。第二に、ライフヒストリーのインパクトの大きさについてです。私は自分の人生を歩んでいます。他の人はどういう人生を歩んできたのか、自分から積極的にこういう場に足を運ばない限り知ることはない世界観を知れたのは、本当に貴重でした。例えば、長江さんの中国日本人残留孤児のお話や在日コリアン、難民キャンプで働いていらっしゃる方のお話は、なかなか当事者でないと分からない事情があったり、差別であったりします。彼ら彼女らの痛みを、お話を聞くことによって知ること、やっとなんか、こういうことで悩んでいる人がいるんだ！こんな方がいらっしゃるんだ！と気づくことができます。第二、第三の人生を歩める 機会はなかなかないですが、ヒューマンライブラリーで話を聞くことで、30分の間で別の人生を仮体験することはとてもすごいことであると感じました。

ヒューマンライブラリー感想

ヒューマンライブラリーは中学の英語の教科書に載っていて興味があったから参加した。5冊の本を借りたのでそれぞれについて感想を述べる。

一冊目は、うつ病当事者の方だった。うつ病になった経緯やうつ病の方にたいしてできることなどについての話を聞いた。話を聞いて、からだも心も休むことがとても大切なのにそれを許してくれない現実があることを感じた。また、そうした状況から救ってくれるのは人だということを知って安心した。なぜなら、家族や友だちで心配な人がいたときに、その人が声をかけられるのを嫌だと思っていてよりストレスを感じていたらどうしようかと不安だったからだ。相手に愛情をもって接したり、軽く声をかけてみたりすることをためらわずにしていこうと思う。自分の行動や経験を良いことも悪いことも話すことはとても勇気がいることだと思う。そうした話はなかなか聞けない貴重なものなので聞いて良かった。

二冊目は、トランスジェンダーかつレズビアンというダブルマイノリティの方だった。こんがらがりやすい多様な性についてスライドを使って分かりやすく説明してくれた。話を聞き、見た目や中身を、無意識に勝手に判断していることに気づかされた。トランスジェンダーとLGBは一人につき一つではなく、いろいろ組み合わさっていると知った。性的マイノリティの方たちはお互いのことを理解し合っていると思っていたから、マイノリティのなかでも排除や無理解があると聞き驚いた。しかし、よく考えれば性別のことに関係なくどの分野でもこうしたことは起こっているのに性別の時だけ別で考えてしまっていたのだと気づいた。

三冊目は、留学同という在日朝鮮人の学生団体の方だった。朝鮮人という言葉やその背景などが知られていないから存在が当たり前で認められていないという話を聞いて、ヘイト行為をしないことと無関心でいることは違うことなのだと感じた。また、朝鮮人でいつづけるためには朝鮮人でいようとしなければいけない今の状況を聞き、留学同のような朝鮮について学べる場や同じルーツを持った人たちが集まれる場がとても大事だと知った。在日朝鮮人の歴史について私自身も学ぶ必要があると感じた。

四冊目は、中国残留日本人戦争孤児の方だった。中国残留孤児という言葉は間違っていて、正しくは中国残留日本人戦争孤児という言葉だという話を聞き、歴史をちゃんと知らない現状が言葉にまで表れていることに戸惑った。これまでなんとなく避けてしまい、戦争の歴史を学ぼうとしてこなかったが、歴史を知らないことが差別や拒絶につながってしまうと知り、戦争の歴史も学ばなければならないと思った。学ぶときは、ただの数字や出来事ではなくそこに巻き込まれた人たちの存在を見ていこうと思う。

五冊目は、目が見えないベンチプレス世界チャンピオンの方だった。目が見えない人も見える人も一緒にの大会に出ていると聞き最初は驚いた。しかし、全てのことで目が見えない人と見える人を分ける必要はなく、同じようにできることもあるのだと気づいた。一緒にできることを探して見つけていけばお互いに分かり合い助け合えるのではないかと思った。

「本」のアンケート

今回の「本」としての自分の語りや読者の反応などについて感想をお書きください。

- ・ 自分の語りに耳を傾けてもらえる充足感と安心感は、生きていることの充実感に繋がるなど感じました。安心して話を聴く、語ることはすべて人にとって大切な機会だと思います。
- ・ 駆け足の発表でしたが、参加されていた方々とじっくりお話しできてよかったと思います。
- ・ 熱心に聞いていただけて、嬉しかったです～
- ・ 読者は非常に真剣に聞いてくれたので話やすかった。スタッフも入れ替わり立ち代りにしていたので、同じ話を繰り返し聞かせて申し訳ないという気持ちにならずにすんだ。交流会までたくさんの読者が残ってくれて関心の高さを感じた。空いた時間にほかの本の話も聞けてよかった。
- ・ 今まで小規模の対話カフェだけだったので、最初は大学での HL 本役に緊張していましたが、スタッフの方々が明るくてすぐに打ち解けました。聞き手役も相槌してくれて話しやすくなりました。30分をもっとこうすれば良かった！と自分自身、反省しています。「話す」リハビリのようです。ありがとうございました。またぜひ来年も学芸大 HL(聞き手も本役も)に行きたいです。
- ・ 交流会でもお話させていただきましたが、自分の話す内容に変化が生まれており、あまりまとまっていない感覚があったので、整理してちゃんと伝えられるようにしたいと思いました。読者の反応も様々ですが、実体験を話すとだいたいは驚かれます。ただ、その驚きを通じて「自分が経験してきた職場は異常だったんだな」と改めて思い、その実体験や気づき・学びから、

今後も何かを伝えることの意義も感じました。これからもヒューマンライブラリーの参加を継続していきたいです。

本ヒューマンライブラリーの運営（スタッフの対応、会場の環境など）に関して、ご意見がありましたらお書きください。

- ・ 寒い中、きめ細やかなご対応をくださりありがとうございます。
- ・ ありがとうございます。来年も引き続き、どうぞよろしく願いいたします。来年はもう少し内容を広げて、難民・避難民・庇護希望者といった故郷を離れざるを得ない人々全般や彼らへの支援の必要性についてお話ししてもよいかと思います。
- ・ 皆さんのおかげでスムーズに行ったと思います。
- ・ いろいろご配慮いただきありがとうございました！ 欲をいえば島の配置は長方形ではなく正方形にしてほしかった。紙芝居を見せながら話すスタイルだったので、長方形だと距離が遠い人は見えない角度の人がいた。
- ・ 最後の交流会では、他のテーブルに囲んでいる方々ともっと話したかったです。自分は本役なので、異動するのを遠慮してしまいました。その他、お名前を忘れてしまいましたが、zoom 打ち合わせと最後の交流会でも色々お世話をして頂いた中国留学生の女性が、とても優しくて助かりました。宜しくお伝え下さいませ。
- ・ 穏やか、かつ、丁寧に接していただき、換気による寒さにも即座に対応していただきました。お陰様でとても心地よく時間を過ごせました。ありがとうございます。

スタッフのアンケートと感想文

スタッフとしての仕事についての感想、反省などをお書きください。

- ・ 多くのことを岡先生がやってくださったのと、事前打ち合わせもそんなに頻繁ではなかったので、スタッフとして大変なことはなく、むしろいろいろな本の方とスタッフとしてお話しできたので実り多い一日となりました。楽しんで参加することができました。裏を返せば岡先生が大変だったと思います。ありがとうございました。
- ・ 楽しく参加させて頂きました。運営に関わらせて頂き、貴重な経験をさせて頂きました。
- ・ いろんな方のお話を聞くことができ非常に有意義な時間になった。
- ・ スタッフで初めて参加させていただきましたが私自身「本」の語り二夢中になり、タイムキーパーとしての職責を感じつつも、語りを遮ることが惜しいと感じる場面が多くありました。反省もありますがスタッフ参加したことでより話を聞く機会を増やすことができ、大変な財産になりました。
- ・ 前回のヒューマンライブラリーに、私は読者として参加させていただきました。今回は実際にスタッフとして、対面で運営の立場でヒューマンライブラリーに参加してみると、全く違った感じがしました。
- ・ まずは、スタッフとして、本としてお越しいただいたゲストさんたちの打ち合わせをすること、あるいは事前に担当の本の資料を読むことが重要であるということを実感できました。今回、最も大事だと思ったのは、人間の多様性いわゆるダイバーシティを実感できることです。生活において、我々はマジョリティの生活を見慣れていることが多く、みんな同じだと考えてしまっているのではないかと思います。もちろん、この社会は大体マジョリティによって動かされ、マジョリティの力が大きいであることは否めない。しかし、我々は社会的動物の人間として、マイノリティのを無視してはいけないと感じている。反省として、今回は本の方の急遽のおやすみで、現場で混乱が生じてしまう一時期がありましたが、うまく解決できました。あと、対面開催とオンライン開催のメリットとデメリットについて考えていきたいです。
- ・ 3年目のヒューマンライブラリー、はじめての対面開催でした。グラレコを現場で行う中で、あまり参加者の方を交流することはありませんでしたが、会全体を見渡せる立場として学び多い時間となりました。語る方はもちろんのこと、本を借りる方のうなずきや表情が会場全体の雰囲気を作り上げていることを実感することができ、温かい気持ちになりました。安全に語りあえる、貴重な空間だと思いました。

全体の運営などについて意見がありましたらお書きください。

- ・ 本の方のお顔か特徴がわかれば助かるなと思いました。大谷さんの送迎にタクシーが使えればよいなと思いました。

- ・ 日常生活の中では出会うことが出来ない方たちのお話を伺う貴重な時間でした。来年度以降は仕事復しますので、読者として参加させて頂きたいと思っています。どうもありがとうございました。
- ・ 非常に楽しく活動できました。また来年も参加したいです。ありがとうございました。
- ・ 30分で語りを切り上げてしまうことの難しさを感じた

ヒューマンライブラリー感想

M 22-7007 君和田真澄

毎日同じ環境で生活しているとルーティーンが多くなり、また、そんな生活が楽でもあり、知らず知らずのうちに、限られた世界に自分の身を置いてしまう。そんな中で知ったのが、今年のヒューマンライブラリーだった。本のラインナップを見ると、興味があるのに、日頃の生活では接点を見つけることが難しい方々ばかりで、是非お話を聞いてみたいと思い、去年は読者として参加した。そして、ヒューマンライブラリーの魅力にはまった。本が直接読者に語りかけてくれる贅沢。去年はオンライン越しだったが、それでも目の前で本が直接語りかけてくれるライブ感の魅力は忘れがたく、その時から来年はスタッフとし、もっと近くでヒューマンライブラリーに参加したいと思ってきた。そして今年。リアルで体験するヒューマンライブラリーは、本の方々の持つ雰囲気や熱感までが感じられ、対面ならではのパワーがあった。オンラインでは、遠方に住む方々と交流できる魅力があったが、今年の本、そして読者の方々が一体となって作り出すその場ならではの雰囲気が熱く、楽しめた。本の方を中心に、空気の揺れや温度が、それぞれの本の世界を教室の中に作り出していた。スタッフとして関わられた分、本の方と語りの時間以外にもお話をする機会にも恵まれた。本の方が、安心して話すことのできる場のあることが嬉しいとおっしゃっていたのが何よりも印象に残っている。読者だけでなく本の方にも喜んでもらえるのなら、こんなに幸せなことはない。本と読者の方に心地よく実りある時間を過ごしてもらおうお手伝いできればと思ってスタッフ参加したはずが、本と読者の方々から、多くの気づきや楽しさ、そして充実感をいただいたことに感謝している。そしてまた近いいつか、同じ時間が共有できればと、次を楽しみに待つ自分がいる。

2022年ヒューマンライブラリー感想

次世代日本型教育システム研究開発専攻1年 M22-7012 蘇施源

去年は読者としてオンラインで参加させて頂きましたが、今年はスタッフとして、対面形式で参加することで、より詳しくイベントの全般について知ることができました。特に今回は日本で初めてイベントの運営として勤めさせて頂きました。大学時代のサークル運営の経験も活かすことができ、すごく嬉しく思いました。今回のヒューマンライブラリーに参加して、自分の学習、研究、仕事や生活だけでなく、より多くの人々に触れるのも社会を生きるのに不可欠なことだと思いました。そうでないと、どんな仕事をしている人であっても、象牙の塔に入り込んでしまうこともあるでしょう。

今回のジューマンライブラリーを通じて、改めて「ダイバーシティ」ということを感じました。特に、人と付き合うとき、「文化は相対的なもの」だとまず受け入れることが重要だと思いました。人はそれぞれ文化・地域などの原因で、先入観やステレオタイプが生じてしまうことが避けられませんが、新たな環境で、初めての人と接するとき、それをできるだけ追い払うことにしたいと思います。

また、「本」を担当してくださった方々に誠に感謝しております。社会において、なかなか聞けないことや話せないことを語っていただいて、世間にはこんなこともあるんだと思ったことがたくさんありました。特に、今回大谷さんの担当スタッフとして、元気をたくさんもらいました。大谷さんと話し合った時、高校時代の経験を思い出しました。その日は路上で足の不自由の人を見ました。周りの人の急いでいる様子に対して、あの人はゆっくりと笑顔で歩いていました。その差は私にとってあまりにも印象深く、今でもはっきりと覚えています。今回はなんと同じようなことを感じていました。それはおそらく逆境にいてもポジティブな態度で生活できることでしょう。

今回のヒューマンライブラリーを通じて、非常に勉強になりました。ありふれた感想なのかもしれませんが、やはり私はこれらの貴重な経験を糧にして、これからの生活に活かしたいと思いません。

ヒューマンライブラリー

鈴木郁絵

初めてのヒューマンライブラリーでボランティアをしてみて、実際に何かを体験している人の話を聞く場というのも中々ないため、面白い取り組みだなと思ったのと聞いている方も話している方も興味があって参加した人たちなので楽しそうに聞いたり話したりして相手の話から何かを得ようとして話して何かを伝えようとしているのが見ていて伝わってきた。普段、誰かの人生について知る機会は本や映画、テレビなどでしかないから本人から話を直接聞け、その人が本になる発想も実際の活動もたくさんの学びがある者ものになっていると思った。

私が今回、ヒューマンライブラリーのスタッフとして様々な人の話を聞いたり手伝う中で話したりして気がついたのは本の方が今回テーマとして話してくださったような出来事やきっかけがあってから自分らしい生き方や自己理解、丁寧に生きることをしていて、それを本人も誇りに思っていて人としても大切な事だと言う事だ。しかし、それは多くの人が気づかずに自分や人生、様々なものをないがしろにして生きてしまっていて、今の社会では何か壁にぶつかったり体調を崩してしまったりそのままでは生きていけなかったりしないと気づかない事であるが、誰にとっても必要な生き方でこんな風に話す機会があったらみんなに大切な生き方に気づいてもらう事ができるのかなと思った。

これらのように多くの人の発信と学びの場になったヒューマンライブラリーのボランティアをして来年も多くの人に快適な発信と学びをしてもらえるよう、お手伝いしつつ、私自身もいろいろ学ばせてもらいたいなと思った。

学芸大での留学生活が始めてから、もう八か月が経った。専門授業以外、様々な面白い授業に出会えた。多文化の授業はその中の一つ。それをきっかけに、マイノリティが抱える悩みや問題などを含めて身近な社会問題について真剣に勉強し始めたが、好奇心に掻き立てられるたび、「もっと当事者の気持ちを知ればよかった」、「もっと早くいろんなジャンルの本を読んでおいて知識を蓄えればいいのに」と、社会との接点が強烈に乏しい、愚かな自分にうんざりした。

そんな中、初めてヒューマンライブラリーに出会えた。ヒューマンライブラリーの魅力と云えば、国籍、専門、職業、年齢、性別、そして未来の進む道、価値観、人生観などそれぞれ違う人々が、同じ空間で「本」の方のお話を聞いたり交流したり、底知れない包容力と多様性の漂流の中に、自分の不安、愚痴も忘れ、様々な色を帯びている「生き方」を実際に感じる点だと思う。今回はスタッフを担当したが、本当にやりがいのある仕事だと感慨深かった。浜田さんの打ち合わせの時も、当日もいろいろなお話を聞いていて、そのやさしく温かいお言葉が人の心を打つ力があると感じた。今振り返ると、ある程度はもう自分の人生の励みになったかもしれない。ほかの本の方たちも、困ったことや苦労したことについても笑わせながらお話してくださったので、終始穏やかな空間が広がっていた。「在日〇〇人」「障がい者」「LGBTQ」…「〇〇者/人」はこんな人だ、といったステレオタイプのレッテルを剥ぎ取ると、目の前の人々がどんな人なのか、どんな生活をしているのかを想像でき、その人の「リアル」を知ることで、かつてとは違った人生観や価値観を得ることは、本当に幸せなことだと思った。

私たちの社会がカテゴリーで人を括るのは実にすごく危ういことだと痛感している。「違い」に対して、法律とか、ニュース記事とか、SNSの評判とかいくらでも変えると思うが、本当に大事なのは、社会の人々は「違い」の存在を認め、自分が思う「同じ」（先入観）を縛られずに物事を考えるのではないだろうか。今このことを気付くのが少し遅いかもしれないが、これからも歩みを止めることなく、「多様性」という正解がなく、答えが一つではない問題を問いかけ続けながらこれからの人生を送りたいと思う。

当日の最後、来てくださった皆さんと一緒に写真を撮った瞬間は私が心の安らぎを感じた瞬間とも言える。その美しい思い出を胸に刻んで、来年度のヒューマンライブラリーを楽しみにする。その時もぜひスタッフとして参加したいと思い、このイベントの素晴らしさをより多くの人を伝えればと思っている。いつか「マイノリティ」と「マジョリティー」の境界線を越えることができ、人々が生き生きと生きられる社会が迎えるように。make difference。